

感動と感謝

柏瀬光寿

成田空港で出国手続きをした瞬間に、日頃の様々な想いを頭の押入れにしまい込む。そして今年も犬（トイプードル、名は民子）と寂しくクリスマスと正月を過ごす不憫な妻に手を振り、涙をそっと拭う。そして機上の人になった徹夜明けの私は、アサヒ・スパードライで夢の中へ。12月23日、タイ・バンコクで籠谷隊長を中心とするダラムサラ隊が集結した。さあ面子は揃った！いざインドへ！！

<旅の友>

バンコクまでの旅路、私の旅の友はいつも決まっていた。ビールに柿の種、そして本だった。そこに今年は初めて「真の旅の友」が加わった。浅野先生である。バンコクまでの約7時間のフライト、ビールを飲んで寝て、食事を取って寝て、本を読んで寝て、このサイクルを2回繰り返してもまだ時間が余る。そこに会話が加わった。これは尽きることがない。浅野先生とは出会って2回目であったが、まるで旧知の友の如く会話が進み、ビールも進み過ぎ、睡眠時間を減らすことになった。しかし翌日、デリーからダラムサラまで14時間のバスの旅が待っていることを考えれば、なんと心に余裕のあったことか。

<電波事情>

出発直前に、民子の遊び道具となりボロボロになってしまった携帯電話を換えた。それまで日本で電話とメールさえ使えれば良いと考えていたが、日本に残す不憫な妻のことを思い、海外でも使用可能な機種に変更した。しかし、またしてもダラムサラでは使えなかった（昨年は成田空港で携帯電話をレンタルしたが使用不能）。「IT 大国インドではないのか！」私がダラムサラに滞在していた2002年当時からのインドの発展・発達には目を見張るものがあり、私はすっかり過信していた。しかしお陰で一切の連絡が途絶え、日本からは完全にフリーになった。何となく開放された気分になり実は嬉しかった。しかし残された妻のことを思い、数日たって電話屋から電話をした。そして妻の言葉を聴いてビックリした。

「電話が通じると思っていたけどまったく連絡がなかったので、心配してインターネットで〔ダラムサラ〕と検索してブログを開いたら、いきなり夫の写真が出ていたのでビックリした。そのお陰で、ちゃんとダラムサラへ着いたことと生きていることが分かったので安心してた。」とのことだった。そのブログこそ、ダラムサラ在住20数年 日本が、いや世界が誇るチベット建築の第1人者 中原一博さんが書かれたアイキャンプについてのものであった。この繋がりにはとてもビックリするとともに、IT 大国の一面が垣間見られた。

<集中力>

アイキャンプ初日の外来。初診は岡田先生と浅野先生（通訳 小川くん）、オペ決定の診察は籠谷先生と Dr.Puri（介助は川邨さん）、術前検査はテンジンと私（介助は藤原さん）、

写真とビデオでの記録は安嶋さん、といつものように配置された。最初は暇を持て余していた私のパートも、すぐに手術が決まって検査待ちの患者さんで溢れ始めた。麻酔の目薬を点けて、Aモード（目の長さ）を測って眼内レンズの計算をし、鼻涙管洗浄をするのが私の役割である。いつものように快調に仕事をこなしていたが、全く途切れずいつまでも続く患者の列を見て、ふと不安になってナースに聞いた。「ネバ カツェレ（患者 何人）？」「スン ギャン タン シプチュ シ シ」「カレ（なに）？」「three hundreds forty four（344）」どうりで列が途切れない筈だ。納得すると同時に不安が襲った。「今日の外来終わるのか？」それから我武者羅にAモードと涙洗に勤しんだ。もちろんチベット人やインド人患者さんや家族とのコミュニケーションを楽しみながら。夜7時、最後の患者さんの検査が終わった。アイキャンプ史上最多外来患者を診た疲れと充実感、そして40歳の体を襲った腰痛と眼精疲労、疲れを紛らすために作った笑顔による顔の筋肉のこわばりは心地良いものであった。さらに夜のIndian chemical beerが体の芯から癒してくれた。

オペは3日間行われた。停電あり、手術中に貧血で倒れるもの2名あり、など色々なことがあった。籠谷先生の冷静沈着な判断、岡田先生&浅野先生のスマイリー・ブラザーズの軽快なコンビ、川邨さんと藤原さんによる的確な器械出しと患者さんを落ち着かせる握手、安嶋さんの患者誘導と写真撮影、テンジンによる麻酔、現地スタッフのヘルプ、すべてが見事に的確にまわり、ほぼ完璧に近い手術が行われたと思う。お陰で私も史上最高の集中力で手術に没頭できたと思う。

今回の手術で印象的だった患者さんが3名いた。1人目が、眼内レンズがどうしても入れられなかったチベット人のお爺さんである。現地の人間にとって、手術が成功か否かの判断基準の一つに眼内レンズが挿入できたかがある。それが出来なかったのだ。手術中に停電となったのを利用して目をつぶって暫く瞑想し、通電後に落ち着いて手術を再開したがレンズがどうしても入らなかった。翌日の診察でその目は弱視による廢用性外斜視であったため、結果的に事なきを得たが、冷や汗で体中がビッショリになった一例であった。2人目がチベットのお坊さんである。術前検査の時からその佇まい、振舞いが落ち着いており、ひとり別格でとても印象的であった。術後にpseudo Tibetanである通訳の小川君が尋ねると、なんとその方はお守りに御加持をされる僧侶であった。その話を聞いて術中の落ち着き振りを納得すると共に、手術をやる前にそのことを聞いていなくて良かった（変な緊張をしなくて）と思った。3人目は31歳の青年だった。年齢ゆえに慎重に慎重を重ねて手術を行った。真白く濁った水晶体を摘出し人工レンズを挿入、さあ無事に終わったと息を抜きかけた時、人工レンズのポジションがおかしいのに気付いた。「どうして？」何ひとつ操作、経過に問題がなかったのに何故？背中に冷たい汗が流れた。私は自分を落ち着かせるために、目を瞑って腹式呼吸を繰り返した。ゆっくりと目を開けて再開。慎重かつ丁寧にレンズの位置を確認。やはり問題ない。大丈夫だ、という確信と多少の不安を残して手術を終えた。翌日の回診で眼帯を取り、彼の不安そうな顔が笑顔に変わった瞬間に、私は成功を確信した。

<感謝>

1999年からスタートし、今回で9回目のアイキャンプ。うち私は8回参加した。このアイキャンプはもともとチベッタ・フレンドシップ波百流（上田苑江 元代表）が初め、それをAOCAが引き継いで現在に至っている。その間、さまざまな問題が生じるも、飽浦理事長や籠谷先生、ダラムサラ隊のコーディネーターである古寺さん、そして現地の小川くん、現地眼科医 Dr. Puri、Rotary club in Dharamsala のメンバー、元院長 Dr. Tsetan や現院長 Mr. Dawa、私の愛するテンジンを初めとする Delek Hospital の面々の協力の下、一つずつ解決し現在まで至ることが出来た。また私達のダラムサラでの活動や滞在を陰で支えてくださった、中原さん（前述）やルンタレストランの山崎直子さん、マリアさん（ダライラマ法王の日本公演での通訳）など現地の日本人の方々にも感謝である。また私がインドへ行くために老体（？）に鞭を打って柏瀬眼科を守ってくれる父やスタッフ、いつも寂しい年末を過ごす妻と民子。そしてAOCAの活動をご支援いただいている数多くのサポーターの方々、とっっても多くの方々のお陰を持ちまして、第9回ダラムサラ・アイキャンプも無事に終えることが出来ました。誠に有難うございました。『合掌』

写真の説明：手製のアイドレープを作成中の安嶋さん